8/14 福

語り継ぐ 2016 ふくい ②

過酷な記憶のバトン

定池りう子さん(67)＝坂井市

八月上旬、坂井市三国町加戸の自宅。滝口和夫さん(九〇)は長女の定池りう子さん(六七)＝同市坂井町下関＝の前に世界地図を広げ、ゆっくりとだが、しっかりとした口調で自らの戦争体験を語り始めた。

陸軍に召集されたのは、二十歳だった一九四〇(昭和十五)年十二月。金沢で二カ月間訓練を受けた後、行き先も告げられずに仲間たちと船に乗り込んだ。

「戦地へ行くのだから覚悟を、とだけ言われた。進む方角から予想するほかなかった」。中国の港に下り立ち、旧満州(中国東北部)を目指して行軍した。

「畑を突っ切り、とにかく歩き続けた。兵隊が歩いた通りに麦が倒れた道ができていた」と語る。重い荷物を背負い、道なき道を一日十里(約四十キロ)、四十日くらい歩いただろうか。過酷な日々に自殺者も出た。馬でさえ、しっぽをつかまれても怒らないほど疲れ切っていた。「何も考えないようにしてただ歩いた。何よりこの移動がものごかった(つらかった)」

世界地図を広げ、命懸けだった行軍の様子を定池りう子さん(左)に説明する滝口和夫さん(右)＝坂井市の自宅で

旧満州では治安維持に当たり、太平洋戦争が始まった四一年十二月にはベトナム・ハノイにいた。終戦までカンボジアやタイ、ミャンマーの国境付近を警備した。世界地図で移動した国々を指さしながら記憶をたどった。

帰国できたのは四七年。ようやく日本に帰れると喜んでいた仲間が途中、船上で病気になり亡くなった。「水葬され、船が遺体の回りをぐるぐる回ったことを覚えている。かわいそうだった」

帰国後は農業に従事し、二年前まで軽トラックを運転していた。寡黙な性格で、定池さんは戦争体験を断片的には聞いていたが、出征から帰国までを通してじっくりと聞いたことはなかった。

「父の優しさや我慢強さは、過酷な体験から来るものだったのか」。話を聞いた定池さんは、あらためてこう感じた。「当時のことをここまで詳しく話せるのは、それだけつらい思いをしたからでしょう。苦労をしたとは聞いてはいたけれど、本当に大変だったのだと分かった」

滝口さんは現在、週四日デイサービスに通いながら妻の照代さん(九〇)と暮らす。苦労を語り合った仲間も一人、二人と欠けていき、戦友会が開かれなくなって久しい。「戦争はしたらあかんこと。誰も得しない」。定池さんにきっぱりと言い切った。

定池さんは、市内で子どもたちに絵本の読み聞かせに取り組んでいる。自分が戦争を語り継ぐのは難しいと感じているが、それでも「父から聞いたことを、少しでも子どもたちに伝えていければ」

(本田優子)